

## 小児看護実習における看護学生の 満足度とその要因

高橋恵美子

### 概 要

小児看護実習に対する満足度とその要因を明らかにする目的で、学生にアンケート調査を実施した結果、以下のことが明らかになった。

1. 小児看護実習に対して86.4%の学生がほぼ満足と感じていた。
2. 小児看護実習の時間に対して、約8割の学生が短いと感じていたが、実習満足度とは相関がみられなかった。
3. 実習満足度に影響する要因として、因子分析の結果「実習病院の人的環境及び実習時間」「受け持ち患児への実際のケアと看護の展開」「実習準備状態」「患児の家族」の4つが抽出された。
4. 抽出された4因子のうち、「受け持ち患児への実際のケアと看護の展開」「患児の家族」の2因子が、学生の実習満足度と強い相関がみられた。

キーワード：小児看護実習，看護学生，満足度，要因

### I. はじめに

看護教育において、臨地実習はそれまで学習してきた知識、技術、態度を統合し、体験的に学ぶ機会として非常に重要な位置を占めている。それと同時に、実習体験の満足感はその後の学習の動機付けに影響を与えるものであるとされている<sup>1)</sup>。

小児看護実習は、平成12年度のカリキュラム改正において、旧カリキュラム（以下旧カリ）の3単位(135時間)実習から、2単位(90時間)実習へと時間が削減された。その結果、旧カリでは保育所実習4日間、病院実習8日間であったのが、保育所2日間、病院6日間の実習となった。

カリキュラムの変更に伴い、実習目標を見直し、実習内容の検討を行った。そして、2年間新カリキュラムを実施してきた。その結果、実習目標、実習内容等検討はしたものの、実習時

間の短縮に伴う対象患者への関わりの短さは否めず、学生の気持ちの中に、実習に対する不満感があるのではないかと考えた。そこで、今回実習終了時にアンケート調査を行い、実習に対する満足度と、満足度と強い相関をもつ要因について調査したのでその結果を報告する。

### II. 研究方法

1. 対象：2001年度看護学科3年次生70名
2. 調査期間：2001年4月～12月
3. 調査方法：小児看護実習終了時に、自記式質問紙を用い調査した。調査は、実習成績とは全く関係ないこと、統計的に処理する事を説明し、同意を得た上で無記名にて行った。

調査内容：調査項目は、早川氏ら<sup>2)</sup>の実習満足度に関する調査項目を参考に、1)実習オリエンテーション、2)受け持ち患児に関する事、3)実習の展開、4)患児

の家族, 5) 実習記録, 6) 教員・指導者・看護スタッフらとの関係, 7) 実習環境, 8) 時間の要素の中から38項目を作成した。回答はそれぞれの質問文に「そう思う」「ややそう思う」「何とも言えない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5段階評価で行った。

4. 分析: 統計解析ソフトSPSS 10.0Jを用いて行った。

### Ⅲ. 結 果

回収数は66名で回収率は92.5%, すべてが有効回答であった。

小児看護実習全体を通して「実習は満足できた」という項目に対しては(図1), 「ややそう思う」と答えた学生が最も多く31名(47.0%), 次に「そう思う」と答えた学生が26名(39.4%)であった。「あまりそう思わない」と答えた学生は2名(3.0%)であった。86.4%の学生が実習に対しほぼ満足であると答えた。実習満足度の平均得点は5段階評価で4.2であった。

「実習時間は短かった」という項目に対しては(図2), 「そう思う」と答えた学生が最も多く37名(56.0%), 次に「ややそう思う」と答えた学生が15名(22.7%)であり, 約8割の学生が実習が短いと感じていた。

アンケート項目38項目を主因子法を用いて因子分析した結果, 第1因子「実習病院の人的環境及び実習時間」, 第2因子「受け持ち患児への実際のケアと看護の展開」, 第3因子「実習準備状態」, 第4因子「患児の家族」の4つの因子を抽出した。

各質問項目の平均得点を, 因子毎に分けて表したものが図3である。

第1因子「実習病院の人的環境及び実習時間」の中では, 看護スタッフとの関係に関する項目の得点が低く, 特に「看護スタッフは声が掛けやすかった」という項目は, 全項目の中で最も得点が低かった。

第2因子「受け持ち患児への実際のケア及び看護の展開」をみると, 平均得点が非常に高い項目と低い項目とに2分された。得点の高い項

目は, 「教員との関係」, 「実習での学び」, 「子どもが好き」, 「グループメンバーの協力」などであった。「教員は声が掛けやすかった」は全項目の中で最も高い得点であった。平均得点の低かった項目は, 「受け持ち患児の疾患は理解しやすかった」「今までの知識や技術を活用できた」「実習記録様式は書きやすかった」「受け持ち患児は看護ケアを受け入れてくれた」「看護過程が展開できた」の項目であった。

第3因子「実習準備状態」の項目をみると, オリエンテーションに関する項目はほぼ平均して4点前後であった。「実習中体調は良かった」「十分事前学習ができた」の2項目の得点が低かった。

第4因子「患児の家族」の中は, 「受け持ち患児のケアが十分にできた」という項目の得点が低かった。

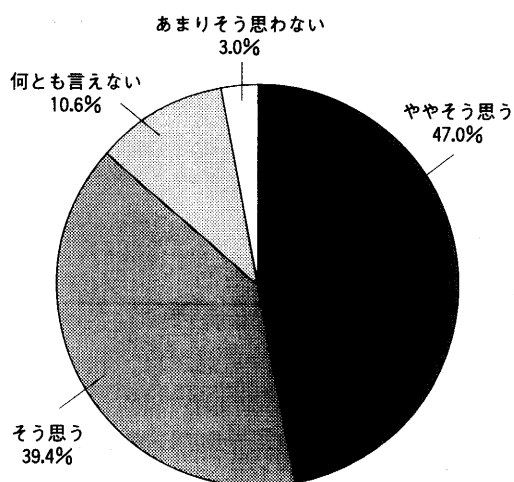


図1 実習は満足できた

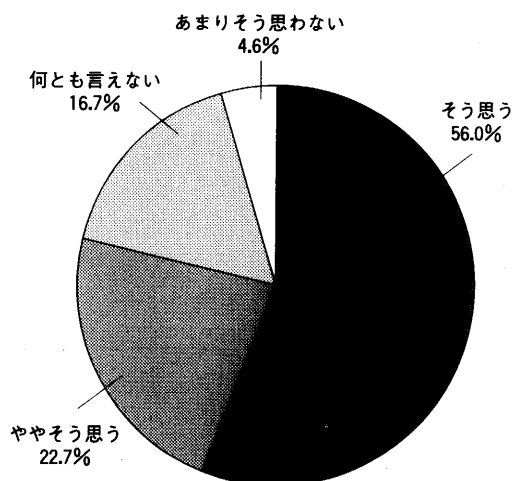


図2 時間は短かった

小児看護実習における看護学生の満足度とその要因

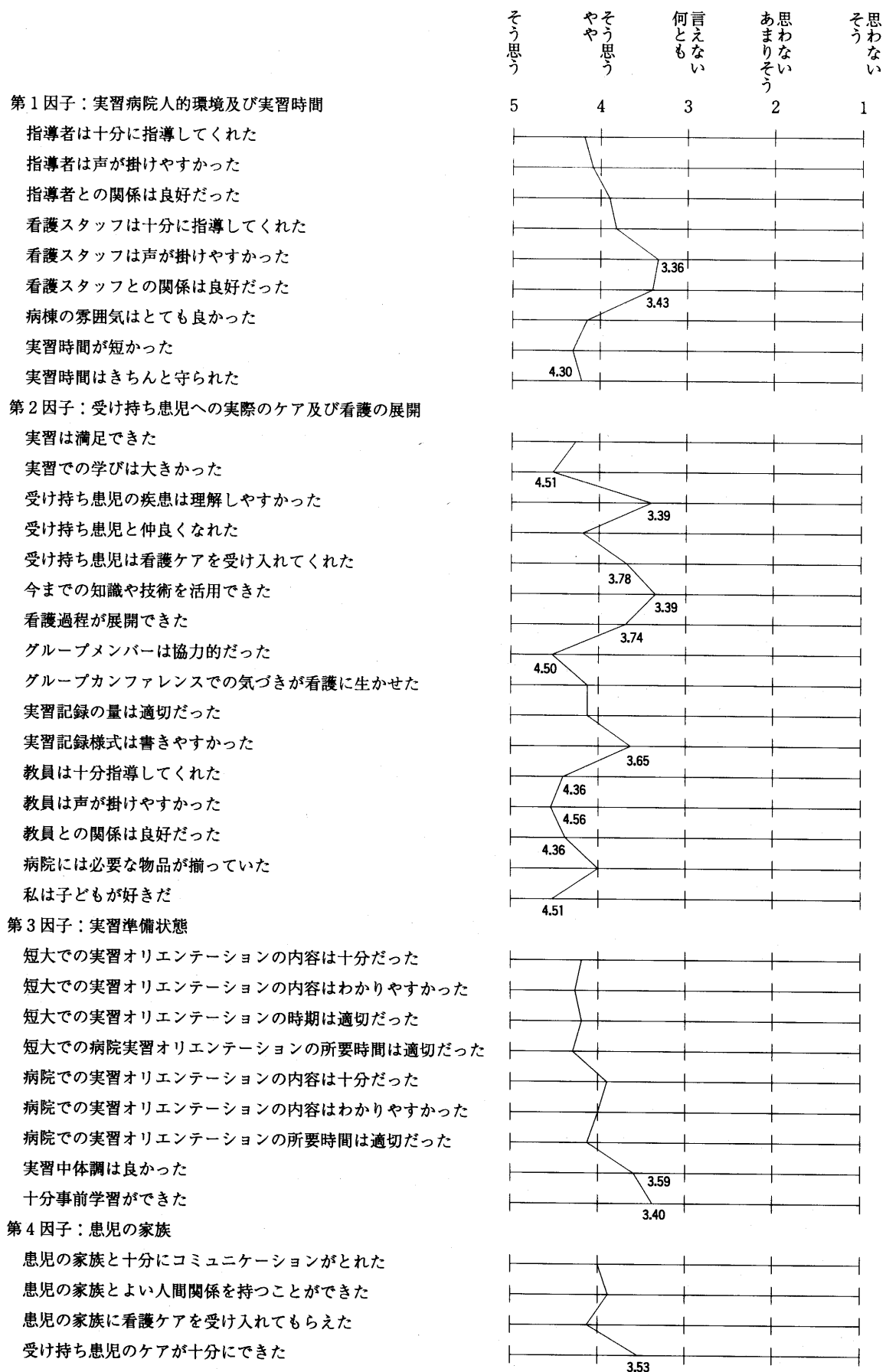


図3 各項目因子別平均得点

実習満足度と各質問項目それぞれとの相関を調べ、因子毎にまとめたのが表1である。

相関係数が0.40以上と高い相関を示した項目は、「教員は声が掛けやすかった」「教員との関係は良好だった」「受け持ち患児のケアが十分にできた」「教員は十分に指導してくれた」「実習での学びは大きかった」「グループカンファレンスでの気づきが看護に生かした」の以上6項目であった。因子毎に見ると、第2因子「受け持ち患児への実際のケアと看護の展開」と、第4因子「患児の家族」に含まれる項目が

相関係数が高かった。第2因子においては、15項目のうち1%水準で有意が認められたのは9項目、5%水準での有意を含めると12の項目において有意に相関が認められた。第4因子においては4項目すべてが1%の水準で有意に相関が認められた。

逆に、相関が低かった項目は、第3因子「実習準備状態」と第1因子「実習病院の人的環境及び実習時間」に含まれる項目であった。第3因子では、「短大での実習オリエンテーションの内容は十分だった」という1項目において

表1 実習満足度との相関

第1因子：実習病院環境及び時間		
指導者は十分に指導してくれた	0.25	*
指導者は声が掛けやすかった	0.09	
指導者との関係は良好だった	0.30	*
看護スタッフは十分に指導してくれた	0.17	
看護スタッフは声が掛けやすかった	0.09	
看護スタッフとの関係は良好だった	0.20	
病棟の雰囲気はとても良かった	0.33	**
実習時間が短かった	0.19	
実習時間はきちんと守られた	0.05	
第2因子：受持患児への実際のケア及び看護の展開		
実習での学びは大きかった	0.44	**
受け持ち患児の疾患は理解しやすかった	0.10	
受け持ち患児と仲良くなった	0.35	**
受け持ち患児は看護ケアを受け入れてくれた	0.28	*
今までの知識や技術を活用できた	0.18	
看護過程が展開できた	0.38	**
グループメンバーは協力的だった	0.25	*
グループカンファレンスでの気づきが看護に生かした	0.40	**
実習記録の量は適切だった	0.33	**
実習記録様式は書きやすかった	0.36	**
教員は十分に指導してくれた	0.45	**
教員は声が掛けやすかった	0.55	**
教員との関係は良好だった	0.51	**
病院には必要な物品が揃っていた	0.23	
私は子どもが好きだ	0.30	*
第3因子：実習準備状態		
短大での実習オリエンテーションの内容は十分だった	0.26	*
短大での実習オリエンテーションの内容はわかりやすかった	0.09	
短大での実習オリエンテーションの時期は適切だった	-0.01	
短大での病院実習オリエンテーションの所要時間は適切だった	0.07	
病院での実習オリエンテーションの内容は十分だった	0.12	
病院での実習オリエンテーションの内容はわかりやすかった	0.15	
病院での実習オリエンテーションの所要時間は適切だった	0.06	
実習中体調は良かった	0.14	
十分事前学習ができた	0.08	
第4因子：患児の家族		
患児の家族と十分にコミュニケーションがとれた	0.36	**
患児の家族とよい人間関係を持つことができた	0.37	**
患児の家族に看護ケアを受け入れてもらえた	0.36	**
受け持ち患児のケアが十分にできた	0.50	**

\* p<0.05  
\*\* p<0.01

5%水準で有意を認められたのみで、他の5項目においては相関係数が0.10より低い結果であった。第1因子では、9項目中3項目で有意に相関が認められたが、相関係数は全体的に低かった。

#### Ⅳ. 考 察

小児看護実習全体の満足度は、8割以上の学生がほぼ満足と回答していること、平均得点が4.2であったことなどから、高いことがわかった。一方、実習時間については、約8割の学生が短いと感じていることがわかった。両者の相関は0.19と低く、相関が認められなかった。学生は実習時間を短いと感じているが、そのことと実習に対する満足度とは結びついていないと考えられた。教員は3単位実習を経験しているために、実習時間の短縮により、学生が患児と関わることができる時間には、かなり限りがあると感じていたが、学生は小児看護実習は2単位の実習という認識のもと、実習時間が短いものとして臨んでおり、そのことに対し、強く不都合に感じたり、不満足に感じたりする事は少なかったと考えられる。

今回、実習満足度と最も高い相関がみとめられた項目は、教員との関係に関する項目であった。この結果は、奥野氏ら<sup>3)</sup>の研究でも同様の結果が得られている。学生指導に関しては、ほぼ実習全体を通して、教員が指導のために臨地実習に臨んでいる。そのため学生は教員に気軽に質問したり、相談したり、十分に指導を受けられることが、実習の満足度につながっていると考えられる。今回の調査では、指導者、看護師との関係に関する項目は、相関が低かった。学生は臨床の看護師から多くの影響を受けていると考えられるが、臨床指導者も専任というわけではなく、受け持ち患児を持ちながらの指導であるために、学生の実習満足度との相関は低かったものと思われる。

次に高い相関を示したのが、「受け持ち患児のケアが十分にできた」であった。この項目は、実際の得点としては3.58と低い値であったが、実習満足度とは強い相関を示した。学生にとっ

ては受け持った患児に対して、自分なりに十分にケアできたと感じられるかどうか、実習の満足度に大きく影響することがわかった。

また、「実習での学びは大きかった」という項目も実習満足度と高い相関を示した。小児看護実習は、相手が子どもであるために、大人と違った難しさがあり、戸惑うことも多い。大人では十分できていた技術であっても、相手が子どもというだけで、あやしながら実施したり、遊びを取り入れて実施したりと工夫が必要であることが多い。そういう意味では、学生はそれまで実習で身につけてきた技術が十分活用できない部分がある。実際、今回の調査でも、「今までの知識や技術を活用できた」という項目の平均得点はかなり低い得点であった。しかし、小児看護実習を通して新しく気づいたり、工夫したりできるようになることも多い。それらの、実習での新しい気づきや、技術や知識の習得が「実習での学び」となって、実習の満足度につながると考えられる。瀬下氏<sup>4)</sup>、山口氏ら<sup>5)</sup>の研究においても、「実習による学習結果や成果」「実習の成果」が満足度と関係が深いと報告されており、同様の結果であった。

「グループカンファレンスでの気づきが看護に生かされた」という項目も高い相関が見られた。早川氏ら<sup>2)</sup>の研究においても、グループダイナミクスの因子において、実習に対する満足度と学生評価に相関が見られたと報告があり、お互いの技術経験や知識、患者ケースの共有などを通して、学習効果や精神的な支えになったことが学生の満足度につながったと考えられる。

以上の項目は第2因子の「受け持ち患児への実際のケア及び看護の展開」に含まれる項目であり、第2因子はかなり実習の満足度に影響を与えることが示唆された。

第4因子の「患児の家族」に関する項目も、平均して高い相関を示した。学生が大人の実習と違い、小児看護実習で戸惑うことの1つに、子どもに付き添う家族の存在がある。多くの学生は母親体験がなく、自分よりも子どもの事をよく知っている母親にどのように接したらよいのか、母子が密着している状況の中でどのようにケアをしていったらよいのかなどに戸惑いや

不安を感じていると考えられる。子どもにとっての家族、特に母親との人間関係が上手く築けることが、実習の満足度にも大きく影響していることがわかった。第4因子の「患児の家族」に含まれる項目の得点は平均して4.0前後であり、学生はまずまずできていると評価していた。受け持ち患児を決定する際には、付き添いをされている家族の様子も考慮し、家族の不安が非常に強く介入が難しいと考えられる患児は受け持たないようにしていることなどから、比較的得点が高かったと考えられる。

第1因子と第3因子に関しては、実習満足度とあまり高い相関が認められなかった。学生はオリエンテーションなどの実習準備に関することや、実習病院の環境など実習周辺のことより、患児や家族への関わり、ケアそのものに実習の満足度が影響を受けることがわかった。

今回の調査項目の中で、特に平均得点が低かった項目は、「看護スタッフは声が掛けやすかった」「受け持ち患児の疾患は理解しやすかった」「今までの知識や技術を活用できた」「十分事前学習ができた」「看護スタッフとの関係は良好だった」「受け持ち患児のケアが十分にできた」「実習中体調は良かった」であった。

「受け持ち患児の疾患は理解しやすかった」「今までの知識や技術を活用できた」「受け持ち患児のケアが十分にできた」、以上の3項目は実習時間が短いことに影響を受けているのではないかと考え、「実習時間が短かった」との相関を調べたが、いずれの項目も相関を認めなかった。小児看護実習は、前述したように対象が子どもであるということで、成人とは違った工夫が必要であり、子どもに慣れるのに時間が掛かる。しかも、子どもの病気の経過は速いため、学生は看護過程を展開しながら、子どもに慣れるので精一杯であり、十分に疾患を理解し、看護ケアを提供できるまでに到らないと考えられる。しかし、今回の調査で、受け持ち患児に自分なりに十分ケアできたと思える事が、実習の満足度にも大きく影響するという結果が得られた。このことから、教員は学生が患児の疾患をきちんと理解し、積極的にケアを実施できるよう、実際の臨床の場面で病態と看護ケアを

結びつけて考えられるよう指導したり、教員も一緒にケアに関わり、実際にやってみせるなどの方法で指導する機会を増やす必要があると考える。

「事前学習が十分できた」という項目の平均得点が低かったのは、子どもという対象の特徴から、受け持ち患児を決定するのが実習の前々日であり、実習開始までに時間がないためであると考えられる。しかし、疾患の病態生理など基本的なことは十分学習可能であり、そのことが患児の疾患の理解にもつながるので、今後さらに事前学習の大切さを強調し、実習開始の時点でのどの程度理解できているのかを確認する必要があると考える。

また、「実習中体調は良かった」という項目の平均得点も低かった。学生は、病院実習の前に2日間保育所実習を経験する。そのときに、保育所で風邪等の感染症をもらう場合が多く、病院実習期間中に体調を崩す学生が多い。病院実習は6日間と短いため、いったん体調を崩すと、十分に実習に打ち込めないうちに実習が終了するようになる。保育所実習での自己の健康管理についても十分オリエンテーションする必要があると感じた。

近年、学生指導は病院の指導者だけでなく、学生が受け持ちをしている患児のその日の担当看護師に依頼する場合が多い。学生は、受け持ち看護師が毎日替わることで、看護師も受け持ち患児を持ちながらの指導であり忙しそうであることなどから、なかなか看護師に声を掛けづらい状況がある。教員は指導者を通して看護スタッフとの連携を十分にとり、学生が実習しやすい環境を作る努力をする必要があると感じた。

## V. 結 論

今回、小児看護実習後に学生の実習に対する満足度とその要因に関する調査を実施した結果、以下のことが明らかになった。

1. 小児看護実習に対して86.4%の学生がほぼ満足と感じていた。
2. 小児看護実習の時間に対しては、約8割の学生が短いと感じていたが、実習満足度と

は相関がみられなかった。

3. 実習満足度に影響する要因として、因子分析の結果「実習病院の人的環境及び時間」「受け持ち患児への実際のケアと看護の展開」「実習準備状態」「患児の家族」の4つが抽出された。
4. 抽出された4因子の内の、「受け持ち患児への実際のケアと看護の展開」「患児の家族」の2因子が、学生の実習満足度と強い相関がみられた。

#### おわりに

今回の調査で、多くの学生が小児看護実習に対してほぼ満足であると回答していた。しかし、実際の看護の展開の部分では十分できていないと感じている現状も明らかになった。学生の満足感が自己満足で終わらないよう、今回得点の低かった項目に対して、指導の強化が必要だと感じた。また、今回は1学年に対して調査したため学生数が限られており、実習時期、実習病院の違いによる検討ができなかった。今後調査数を増やし検討していきたい。

#### 文 献

- 1) 阿部明美, 原田慶子: 学生の達成感・満足感から基礎看護学実習 I を考察する (第一報), 日本看護学教育学会誌, 8 (2), 79, 1998.
- 2) 早川明子, 大塚邦子, 松寄英士: 実習の自己評価に影響を及ぼす因子の分析—臨床実習における満足度—, 東邦大学医療短期大学紀要, 7, 30—36, 1993.
- 3) 奥野順子, 日沼千尋, 石川真理子他: 小児看護実習における学生の満足度, 日本小児看護学会誌, 9 (1), 50—51, 2000.
- 4) 瀬下文子: 看護実践場面での, 達成感・期待感・満足感に影響を与える実習での体験, 日本看護学教育学会誌, 7 (2), 67, 1997.
- 5) 山口桂子, 桑野タイ子, 宮崎和子他: 臨床実習教育に関する学生の意識調査 (その5) —因子分析法を用いて—, 第19回日本看護学会看護教育分科会集録, 62—64, 1988.

## **Factors Related to The Satisfaction of Nursing Students with Pediatric Nursing Practices**

Emiko TAKAHASI

### **Abstract**

In order to clarify student nurses' satisfaction with pediatric nursing practices and the factors related to their satisfaction, a 38-item questionnaire was distributed to the students.

66 responses were valid and revealed the following facts.

- 1) Eighty-six percent of students felt mostly satisfied with pediatric nursing practices.
- 2) Approximately 80% of students felt that their training for pediatric nursing practices was too short. But this didn't affect the satisfaction of the students.
- 3) Four factors exhibited an influence on satisfaction : the human environment of the hospital where the student nurse practiced nursing ; practical care for patients and the nursing process ; preparation for nursing practices ; and the family of the patients.
- 4) Two factors correlated closely with the satisfaction of the students : practical care for patients and the nursing process ; and the family of the patients.

**Key words and phrases :** pediatric nursing practices, nursing students, satisfaction, factor